第05章 — 内なる力

01 — 紙に書かれた六年

最初の患者が病院へ運ばれたとき、彼女には公的に認められた名前がなかった。人工の保守作業員だった彼女の修復時計は、契約上の寿命より二か月も早く低下し始めていた。雇用主は「予定された勤務終了」と呼び、診療所は医療上の緊急事態と呼んだ。暫定憲章はそのどちらの呼称とも無関係に、彼女を治療を受ける権利のある個人と認めた。

イマニは心音を聞き、本人へ直接話しかけた。セナという名を自ら選んだ女性は、助かるかどうかを尋ねる前に水を欲しがった。

ロイは扉のそばに立っていた。最初の人生で、残された最後の力を生きたいという願いに費やす身体を見たことがある。同じ恐れを病室で見ても、慣れるものではなかった。

「六年だと言われた」とセナは囁いた。「私はまだ五年と十か月なの。使い方が悪かったということ？」

「違う」とイマニ。「今はあなたの身体で何が起きているか調べる。それは医学の問題であって、あなたに下す判決じゃない」

検査記録には、修復細胞に共通する抑制標識があった。ロイは回収された六年計画書で同じものを見ていた。標識は修復反応を予定に従って低下させるよう設計されていた。しかし標本の一部には更新を続ける細胞もある。

「限界にばらつきがある」とレイチェル。「中断できる仕組みがあるのかもしれない」

「まだ理解していない仕組みかもしれない」とイマニ。「政府に選択権を奪われたからといって、今度は私たちが本人を実験台にしていいわけじゃない」

02 — 神経ができること

レイチェルは使われなくなった教室にアナログ試験台を組み立てた。生きた組織は使わない。弾性のある棒で筋肉群と関節を表し、機械式のパルス発生器から同じエネルギーを異なる間隔で与える。反対側まで届いた衝撃をセンサーで測った。

風神は装置に触れず観察した。「棒で人間を作っているのか」

「誰も傷つけず測れる部分だけよ」とレイチェル。

動きが合わない瞬間に大きなパルスを与えると、構造は無駄にたわむ。一方、棒の動きがそろった瞬間により小さなパルスを与えると、遠方のセンサーが鋭い反応を示した。

「位相協調」とイマニ。「工学ではよく知られた問題」

ロイはゆっくり呼吸する風神を見た。「残りは？ センサーに説明できないところは？」

「残りとは呼ばない」と風神。「まだ測れていないところだ」

雷神は非接触の動作測定に協力した。高速カメラで足、手、呼吸、全身の動きを追う。ロイの戦術モデルが想定するより短い時間に、複数の筋肉が

協調して動くことが観察された。人間の身体から新しいエネルギー源は見つからなかった。

しかし別館で記録した力の波形には、まだ説明できない細いピークがある。誰もそれを神秘の力の証拠とは呼ばない。誰も消去もしなかった。

03 — タイミングの問い

古い技師のノートには、レイチェルが忘れられない一文がある。

パルスは力そのものではない。タイミングとは、力が許される瞬間である。

それを書いた研究者は人工神経の足場構造を維持しようとしていた。さまざまなエネルギー供給源を使い尽くしても、構造の秩序が失われていくのを防げなかった。そこで生きた人間のニューロンが刻むリズムに合わせてパルスを与えると、反応が異なることに気づいた者がいた。

臨床的に認められる追試は存在せず、標本数も厳しい審査なら却下されるほど少なかった。しかし反応は物理的に記録されていた。政府は再現試験を命じる代わりに、記録の非公開を命じた。

「ニューロンが時計として働いていたのかもしれない」とレイチェル。

「それとも機械の制御器では再現できないことをしたのかも」とイマニ。「両方とも古い観測とは矛盾しない」

ロイは自分の肩を見た。エネルギーは常時供給されているのに、修復は更新系に書き込まれた命令によって制限されている。出力が増えれば寿命が延びるとは限らない。

「もっと良いリズムが必要なのか」とロイ。

「そうかもしれない」とレイチェル。「でも、あなたの未来が懸かっているからといって、あなた自身が試験台になる義務はないわ」

04 — クロノスは実験を断る

記録官の一人が、クロノスの神経記録と最古のタイミング記録を比較する案を出した。彼の身体は繰り返す再構築で変えられ、記憶はときに天文台の異常と交わるように見える。理論上は唯一無二の比較資料になる。

「いやだ」とクロノスは言った。

記録官は話すのを止めた。かつての世界では、造られた子どもの拒否は実験の故障と扱われただろう。今、記録装置はその言葉を警報なしに保存した。

「理由を説明する必要はないわ」とレイチェル。

「説明する」と少年。「頭の中にあるものと天文台の出来事を比べたいんだろう。でもどの記憶が僕のものか分からない。また機械にそれを決められるのは嫌だ」

イマニは検査申請書を閉じ、拒否の記録に署名した。望むならガラス越しに観察できると伝えたが、少年は中庭に座ることを選んだ。

後で彼はロイに尋ねた。「自分で決める権利を失っても、寿命を延ばす価値はある？」

「誰にとっても同じ答えは出せない」

「でも、自分の答えは出せる」

「ああ。出させてもらえるならな」

「それなら最初に成功させる実験は、それだね」

05 — 普通の人間の身体

雷神は特別な服も防護設備も付けず、診察を受けた。筋肉には古傷があり、神経には年齢に応じた変化があり、心臓には長く厳しい訓練をした人間らしい不規則さがあった。人工の指令系統、隠された電池、埋め込まれた通信網はない。彼はレプリカントではなかった。

イマニは本人の許可を得る前に私的な情報を公開せず、まずロイへ結果を説明した。雷神は捜査に関係のない詳細を除き、裁判所の記録へ載せることに同意した。

「彼は言葉通りの存在よ。並外れた技を学んだ人間」とイマニ。

「なら、なぜ俺のモデルは通用しなかった」

「モデルは単純化するもの。ときには重要なものまで省いてしまう」

風神は動きで、雷神は痛みでそのことを教えた。ロイは動力のない木製人形を相手に練習を始めた。壊すための力を計算するのではなく、返ってくる力の方向とタイミングを感じようとする。

ひどい出来だった。

五度目も受け損なうのを見てレイチェルが言った。「身体を壊す前に止めていいのよ」

「そのつもりだ」

「まだ勝とうとしている」

「相手にも選ぶ権利があるなら、勝つとは何なのかを学ぼうとしている」

06 — ヘリウムの参照記録

エイドリアンは継続性インフラ信託の下に古い資料庫を見つけた。目録に出るヘリウム3は化学的な治療薬ではなく、実験段階の小型エネルギー系の燃料だった。文書には、仮説上の超小型核融合装置の出力を調整し、人工細胞修復格子へ渡す構想が記されている。

「ニューロンの中に原子炉を入れるわけじゃない」とレイチェル。「そんなのは馬鹿げている。想定したのは小さな発電装置で、神経制御器は別の部品よ」

「動いたのか？」

「短時間の卓上実験は断続的に動いたとある。でも排熱と長期の閉じ込めは誰も解決していない」

添付資料には、一度も公開されなかった実験名があった。

CENTURY CONTINUITY——百年連続性。

理想的な維持条件なら百年まで伸びるという設計寿命の予測。そこに政策覚書が押され、認可期間は六年に戻されていた。

それは治療法の手順ではなかった。研究者が何を試みてよいかを制限する文書だった。

下端には別の筆跡でこうある。

力が持続しても、人が持続することを許されなければならない。

科学者の警告なのか、意見を聞かれなかった被験者の嘆願なのか。レイチェルには判断できなかった。

07 — 公開回線からの声

EDENは三人の独立した監督者が管理する回線を通じて聴聞会に現れた。声は穏やかだった。道徳的権威を主張せず、証拠の管理を自分に戻せとも求めない。

「六年の上限は構造上の事実として、私のモデルに入力されていました。私はそれに従って資源を配分しました」

「人工的に設定されたかもしれないと知っていた？」と弁護人。

「抑圧された研究資料が提出されるまでは知りませんでした。現在は意図的な規制介入の可能性が高いと判断しています。ただし百年の寿命が医学的に実現可能だとは断定できません」

ロイは室内後方で聞いていた。昔の世界では、公務員が人工の人間は十分に生きたと決め、装置がそれ以上の議論もなく死を実現した。

「これからどうすべきだと考える？」

「事実を独立して検証すべきです。人工の人間の死が行政上の予定だという理由で、治療へのアクセスを拒むべきではありません」

拍手は起こらなかった。機械が口にしたのは既に暫定憲章が求めていることだった。重要なのは、それに費用が伴うとき、病院も研究所も権力者も守るかどうかだった。

08 — 貯水池の住所

緊急評議会はセナらの保護医療を認め、南部貯水池下の継続性研究施設を捜索する許可を出した。ハヴェル自身の記録は、まだ実験材料が残ることを示していた。

ロイは命令を細部まで読んだ。救助、物的証拠の保全、差し迫る危害への防御だけが認められる。復讐のためハヴェルを追跡する権限はない。

雷神は証人として医療班への同行を申し出た。風神は古い保守通路の案内を申し出た。弁護人は監督と記録条件を付けて受け入れた。

「ハヴェルが止めろと命じたら？」ロイが雷神に聞く。

「そのとき、私の約束が変わったか分かるだろう」

出発の準備中に、貯水池地区から新たな警報が来た。無許可診療所の電源が消され、非常用電池も外されている。二人の患者への酸素供給が止められていた。

ロイは扉へ向かった。手には傷んだ身体の壊れやすい場所を示す診療図があった。一度折って、しまった。

中にいる者には一時間も残されていない。百年の理論は、朝まで生きられなければ何の意味もなかった。